

集英社版

世界文学全集

81

サリンジャー
エイジャー
九つの物語
家族のなかの死

訳 Ⅱ

中川 敏

金関 寿夫

集英社版 世界文学大系 81

九つの物語／家族のなかの死

一九七八年九月二十五日 印刷

一九七八年十月二十五日 発行

訳者 中川 敏／金関寿夫

編集 株式会社 綜合社

一〇一 東京都千代田区神田神保町三十一番一〇
電話 (〇三) 二三九一三八一一

発行者 堀内末男

発行所 株式会社 集英社

一〇一 東京都千代田区一ツ橋二一五一一〇
電話 出版部 (〇三) 二三〇一六三六一
販売部 (〇三) 二三八一二七八一

印刷所 凸版印刷株式会社



目次

サリンジャー

九つの物語

エイジー

家族のなかの死

後記

解説

年譜

中川 敏訳

3

金関寿夫訳

151

中川 敏／金関寿夫

469 461 459

九つの物語

双手の打つ音を聞く。

されば^{せき}隻手の打つ音はいかに？

—— 禅公案 ——

バナナフィッシュに最適の日

ホテルにはニュー・ヨークの広告業者が九十七人もいて、彼らが長距離電話を独占しているために、五〇七号室にいる若い女は正午に申し込んで二時半近くまで待たなければならなかった。もっとも、そのあいだ彼女は時間をうまく使つてはいたのだが。ポケット版婦人雑誌に載っている「セックスは快楽か苦痛か」という記事を読む。櫛とブラシを洗い、ページジュの服のスカートについていた染みを取る。サックス百貨店製のブラウスのボタンをつけかえる。黒子に生えた新しい毛を二本抜き取る。交換手がやつと彼女の部屋を呼び出したとき、窓際の椅子に坐つて左手の爪にマニキュアをもう少しで塗り終えるところだった。

彼女は、電話が鳴ったからといって、やりかけていることを途中でやめるようなことは絶対にしないたちの女だった。年頃になってからずっと自分の電話は鳴りつづけている、といわなければかりに平気な顔をしている。

電話が鳴っているあいだも、彼女は小さな刷毛で小指の

爪にマニキュアを塗りつづけ、三日月形の線が目立つように念を入れた。それから、マニキュアの瓶に栓をして立ち上がり、左の塗りたての方の手を前後に振つて空気にさらした。乾いている方の手で吸殻で一杯の灰皿を窓際の椅子から、電話機のあるナイト・テーブルの上に移した。きちんと整えてあるツイン・ベッドの片方に腰を下ろして、五回か六回呼び出しの合図の鳴った電話を手にとつた。

「もしもし」 白い絹の化粧着にふれないように左手を伸ばしたまま彼女はいった。スリッパを除けば彼女が身に付けているものといえはこの化粧着ぐらいのものだ。指輪の類は浴室においたままになっている。

「グラスさんの奥さんですね、ニュー・ヨークにおつなぎします」と交換手がいう。

「ありがとう」といって、彼女はナイト・テーブルの上のものを動かして灰皿を置きやすくした。

女の声が聞こえてきた。「ミュリエル？ あんたなの？」
彼女は耳から受話器を少し離れた。「そうよ、お母さんお元気？」

「わたしはね、あんたのことで心配のしどおしだったのよ。どうして電話をよこさなかったの？ 大丈夫なの？」

「昨夜も、その前の夜も電話をしようと思ったの。ところがこの電話ときたら——」

「大丈夫なのかい、ミュリエル？」

娘は受話器を耳からさらに遠ざけた。「ええ元気よ。暑いわ。フロリダで一番暑い日なんですって——」

「どうして、電話をよこさなかったの？ わたしはとても心配で心配で——」

「お母さん、そんな大きな声しないでよ。よく聞こえるのよ」と娘がいう。「昨夜二度も電話をしようとしたのよ。一度はちょうど——」

「お父さんには、たぶん昨夜は電話をよこすでしょうっていつておいたのよ。でも、だめなのよ、お父さんはどうしても——大丈夫なの、ミュリエル？ ねえ、本当のことをいってちょうだい」

「大丈夫よ。何度も同じこと訊かないでよ、お願い」

「いつ、そちらに着いたの？」

「よく分らない。水曜の朝早く」

「誰が車を運転したの？」

「あの人が運転したのよ」と娘は答える。「興奮しないですよ。彼、とても上手に運転したわ。びっくりするほど上手だった」

「あの人が？ ミュリエル、あんたわたしに約束したでしょ——」

「お母さん」娘がさえぎった。「いまあたしがいったでしょ、とても上手に運転したって。ずっと五十マイル以下で。本当よ」

「木にまた例の変なことをしたんじゃないでしょうね？」

「とても上手に運転したっていったでしょ、お母さん。ねえ、お願いだから、くどくどいうのはもうやめて。白線よりに走らせるようにってあの人のいうとおいたの。そして、彼はあたしのいうことをきいてくれたわ。その通りにしてくれた。木を見ようともしなかったわ——分かっていただきたいわ。ねえ、ついでに訊けど、お父さんあの車を直しに出してくれたかしら？」

「まだなのよ。四百ドルもかかるんですって、ほんのちょっと——」

「お母さん、シーモアがあれば自分が払うからって、お父さんにいったじゃないの。お父さんが払うことはないわ——」

「そうねえ。それで、あの人はどんなふうだったの——車の中やなかで？」

「別に何でもなかったわ」と娘が答えた。

「相変わらずあんたのこと呼んでいたんじゃない、例のひどい——」

「そうじゃないの。こんどは前と違うのよ」

「なんですって？」

「ねえ、そんなことどうでもいいじゃない、お母さん？」

「ミュリエル、わたしは知って、おきたいの。お父さんが——」

「いいわよ、分かったわ。彼はあたしのことをへ一九四八年度のミズ精神的浮浪者」って呼ぶの」と娘はいつて、くすくす笑った。

「おかしくありません。少しもおかしくないわ。ひどい話だわ。悲しいわ、本当に。どういうことになるかと思うと——」

「お母さん」娘がさえぎった。「聞いてちょうだい。彼がドイツから送ってくれた本のこと覚えている？ ほら——あのドイツ語の詩の本のこと。あれ、どうしたかしら？ 思い出そうとするんだけど——」

「ありますよ」

「本当？」と娘がいう。

「本当よ。ここにあるわ。フレディーの部屋よ。あんたがおいていつてしまつて、おくところがなかったから——それでどうしたつていうの？ 彼がいるつていうの？」

「そうじゃないの。ただ、彼が車の中であの本のことであたしに質問したから。あたしが読んだかどうか知りたかつたのね」

「あれはドイツ語なんですよ！」

「そうなの、でも、そんなことでもいいわ」娘は足を組んだ。「あの詩は今世紀ただ一人の偉大な詩人の書いたものなんですって、彼がそういつてたわ。あたしが翻訳か何かを買ったらしいのにつて。それとも、その気があつた

ら、ドイツ語を勉強しておくべきだった、なんていつてたわ」

「こんでもない。悲しいことだわ。こんなことじゃ。お父さんが昨夜おつしやつていたわ——」

「ちよつと待つて、お母さん」娘はそういつて、窓際の椅子へ煙草を取りにいき、火をつけて、またベッドに腰を下ろした。「お母さん」そういつて煙を吐いた。

「ミユリエル、さあ、ちゃんと聞いてちょうだい」

「聞いてるわ」

「お父さんがシヴェツキー先生にお話しになったのよ」

「あら、そうなの？」

「すっかり先生に話したの。ともかく、お父さんはそうおつしやつていたわ——あんた、お父さんがどういう人か知つているわね。例の木のこと。窓の件も。彼がお祖母さまに死んだらどうするかなんて訊いた、空恐ろしい件のことも。パーミューダから持ってきたあのきれいな絵に彼がわるきをしたことなんかも——何もかもすつかり」

「そうだったの？」

「そうよ。先生のおつしやるには、そもそも陸軍病院があの人を退院させたつてことが、完全な間違いだったんですつて——本当ですよ。シーモアがまるつきり自制心を失う可能性がある、それも多分にありうることだと先生ははつきり断言されたのよ。嘘じゃありませんからね」

「このホテルにも精神分析の専門家がゐるわ」と娘がいった。

「だれ？ 何ていう人？」

「よく知らないわ。リーザーとかいう人。評判がいいよね」

「そんな人、聞いたことないわね」

「でも、評判はいいのよ」

「ミュリエル、お願いだから、分かりもしないのに、早合点したりしないでね。わたしちあんなのこととでも心配しているのよ。お父さんは昨夜、帰ってくるようになって、あんに電報を打ちたいなんていつてらしたんですよ。ほんとう——」

「あたしまだ帰りたくないの、お母さん。だから、気を鎮めてよ」

「ミュリエル、本当なのよ。シヴエツキー先生のおっしゃるにはあの人**はまるつきり**、自制心を失ってしまうかも知——」

「あたしここに**着いたばかり**なのよ、お母さん。数年ぶりの休暇なんだから。着いて早々に荷物をつめて帰るなんていやだわ」と娘がいう。「とにかくいま旅行なんてできそうもないわ。すっかり日に焼けて動けないのよ」

「ひどく日焼けしたの？ 靴**かばん**に入れてあげたブロンズのクリームを使わなかったの？ ちゃんと入れておいたのに

——」

「使ったのよ。だけど焼けちゃったんですもの」

「それはいけないねえ。どこを焼いたの？」

「体じゅうなの。体じゅうすっかり」

「いけないわねえ」

「命に別状ないわ」

「ねえ、その精神分析の先生に話をしたの？」

「ええ、ちょっと」と娘が答える。

「それで、先生は何ていつていたの？ 先生に話をしたとき、シーモアはどこにいたの？」

「大洋の間で、ピアノを弾いていたわ。ここにきてから

ふた晩とも彼はピアノを弾いていたの」

「ねえ、それで先生は何ていつたの？」

「別にたいしたことはいわなかったわ。先生の方からあたしに話しかけてきたの。昨夜**ビュンゴ**をしていたとき隣に坐つたの。そしたら、あちらの部屋でピアノを弾いているのはあなたのご主人かつていうから、そうだってあたしは答えたの。先生が、ご主人は病気ではないのかっていつたわだから、あたしは——」

「なぜ先生がそんなこと訊いたのかしら？」

「あたし知らない。彼の顔がとても青ざめていたりしたからじゃないかしら。それから、ビュンゴのあとで、先生と奥さんが一緒に飲まないかっていうの。それで、一緒に飲ん

だわ。その奥さんというのが傑作なのよ。ボンウィットのウィンドーで見たあのひどいディナー・ドレスのこと、お母さん覚えてる？　ほら、お母さんが小さな小さなお尻の人でなくっちゃっていった——」

「あのグリーンの？」

「そう、それをその奥さんが着ていたのよ。全身これお尻って図ね。奥さんは、シーモアがマディソン街に婦人帽子店を出しているあのスザンヌ・グラスの親戚かって、しつこく訊くのよ」

「ねえ、それで、何ていったの、先生は？」

「うん、たいしたことはないのよ、本当に。あたしたちバーやなんかにいたの。ひどくうるさくって」

「そう。でも、あの人がお祖母さまの椅子になにをしようとしたか、話したんでしょ？」

「いいえ、話さなかったわ。あまりくわしいことはいわなかったの」と娘がいった。「たぶんまた話をする機会があると思うわ。その先生は一日じゅう、バーにいらんですもの」

「あの人が——おかしくなったりする可能性があると思うというようなことを、先生はいわなかった？　あんなに何かするとか！」

「そうはつきりしたことは何もいわなかったわ」と娘がいう。「先生はもっといろいろな事実を知ってからでなくちゃ

だめなのよ、お母さん。子供のときのことだとか、いろんなことを知ってからでなくちゃ。さっきもいったけど、とても騒がしくって、あまり話ができなかったのよ」

「そう。あなたのブルーの上着はどんな具合？」

「ちょうどいいわ。詰物を少し取らせたから」

「今年の洋服はどんなふうなの？」

「感心しないわねえ。でも、とびきり豪華。金ピカなのよ——何でもかでも」

「あなたの部屋はどう？」

「いいわ。でも、まあまああってとこだわね。戦前に泊まったような部屋はとれなかったもの」と娘がいう。「今年のお客はひどいわね。食堂で隣に坐っているのときたら、ひどいったらありやしない。隣のテーブルよ。トラックにでも乗ってきたかと思うような連中なの」

「そう。どこもそうらしいわね。こんど作らせた、あのバレーリーナはどう？」

「長すぎるのよ。長すぎるっていったでしょ」

「ミュリエル、もう一度だけ訊くだけけれど——本当に大丈夫なのね？」

「ええ、大丈夫よ、お母さん」と娘はいった。「何べん訊いても同じことよ」

「それに、帰る気もないんだね？」

「ないわ、お母さん」

「あんたが一人でどこか別のところに行つてよく考えてみるというのなら、喜んでお金を出すつて、お父さん昨夜もそういつてらしたのよ。きつと、すてきな旅ができるでしょ。お父さんと一緒に考えただけ——」

「いいえ、結構よ」娘はそういつて組んだ足を解いた。「お母さん、電話料がとても高く——」

「あんたが戦争中ずつとあの人を待つていたことを思うと——いいえ、ねえ、あの氣違ひみたいになつた氣の毒な奥さんたちのことを思うと——」

「お母さん、もう電話を切つた方がいいわ。シーモアがいつ入ってくるか分からないんですもの」

「どこにいろの？」

「海岸よ」

「海岸？ 一人つきりで？ 海岸でおとなしくしているんでしょうね？」

「お母さんたら」娘がいった。「あの人のこと、まるで手のつけられない氣違ひのよういのね——」

「そんなこといつてませんよ、ミュリエル」

「だって、そんなふうに聞こえるんだもの。あの人にできることは寝そべるぐらいのことなのよ。化粧着を脱ごうとしないんだから」

「化粧着を脱ごうとしないの？ どうしてなの？」

「あたし知らないわ。青っ白いからでしょ」

「そんな！ だったら、な、お、き、ら、日に当たらなくちゃいけないのに。あんたが仕向けることができないの？」

「シーモアがどんな人か、知つてるでしょ」娘はそういつてまた足を組んだ。「大勢の馬鹿どもに刺青を見られるのはご免だつていつてるわ」

「刺青なんてないわよ！ それとも、軍隊でしたのかしら？」

「違うわ、お母さん、そうじゃないの」娘はそういつて立ち上がった。「聞いてちょうだい、あたし明日またかけます、たぶんね」

「ミュリエルったら。ねえ、わたしのいうこと聞きなさい」

「はい、はい、お母さん」娘は右足に重心を移しながらいった。

「あの人が何か変なことを口走つたり、おかしな素振りがあつたら、すぐに電話するんですよ——お母さんのいうことが分かりますね。いいわね？」

「お母さん、あたしシーモアのことこわくなんかないのよ」

「ミュリエル、わたしに約束してちょうだい」

「ええ、いいわ。約束するわ。さようなら、お母さん」娘はいった。「お父さんによろしく」彼女は電話を切つた。

「もつと鏡を見て」母親と一緒にホテルに泊まっているシビル・カーペンターがいった。「ねえ、もつと鏡を見た？」

「さあ、おちびさん、そんなこというのはやめてちょうだいな。ママ本当に頭にきちゃうんだから。黙っててよ」

カーペンター夫人は日焼けじめのオイルをシビルの肩に塗り、それを背中^{きんちゅう}の翼のような華奢な肩胛骨^{けんこうこつ}に拡げていく。シビルは海の方を向いてふくらんだ特大ビーチ・ボールの上に危なっかしく坐っている。彼女はカナリヤ色のツーピースの水着を着ているが、実際のところ上の方のはあと九年か十年はなくてもいいものだった。

「それは本当にごくありふれた絹のハンカチだったのよ——そばによって見れば分かるわ」カーペンター夫人と並んでビーチ・チェアに坐っている女がいった。「彼女がどうやって結んだのか知りたいわ。とてもすてきだった」

「すてきだったようね」カーペンター夫人が相槌^{さづ}をうった。

「シビル、じつとしていなきい」

「ねえ、もつと鏡を見た？」とシビルがいう。

カーペンター夫人が大きく息を吐いた。「いいわ」彼女は日焼けじめオイルの瓶に栓をした。「さ、遊んでらっしゃい、おちびさん。ママはホテルにいつてハバルさんの奥さんとマティーニを飲むのよ。あとでオリーブを持っていってあげますからね」

自由にされるとすぐにシビルは海岸の平らなところへ駆

け下り、それから〈漁師館〉の方へ歩いていった。立ち止まって崩れた水びたしの砂の城に片足を突っこんで、それからシビルはホテル客専用の区域から出ていった。

シビルは四分の一マイルほど歩くと、不意に海岸の軟らかいところを斜めに駆け上がる。ひとりの若い男が仰向けに寝ているところまでくると、彼女はびたりと止まった。「水に入るところなの、シー・モア・グラス？」と彼女はいった。

若い男ははっとしてテリー織りの化粧着^{けいざく}の折り襟^{えり}のところへ右手をやった。体をまわして腹這^{はらばた}になると、目の上においてあったソーセージのように巻いたタオルが落ちるのをそのままにしておいて、若い男は横目でシビルを見上げた。

「やあ、こんにちは、シビル」

「水に入るとこなの？」

「きみを待っていたのさ」と若い男がいう。「何かニュースはない？」

「何かって？」

「何かニュースは？ 何か予定していることはないのかな？」

「パパがあした飛行機で来るのよ」シビルが砂をけりながらいった。

「ぼくの顔にかけないでくれよ、おちびさん」そういつ

て若い男はシビルの裸に手をあてた。「うーむ、もうきみのパパが来るころなんだね。ぼくはきみのパパが早く来ればいいと、ずっと思っていたんだよ。ずっと」

「女の人はどこ？」とシビルがいった。

「女の人って？」若い男は薄い髪の毛のあいだから砂を払い落とした。「それはちょっと返事がむずかしいなあ、シビル。いるところがたくさんあって、さてどこにいるのかなあ。美容院で、髪をミンク色に染めているかしらん。それとも、お部屋で気の毒な子供たちのためにお人形さんを作っているのかな」うつ伏せになったまま若い男は握り拳を二つ作って重ねて、その上に顎をのせた。「別のことを訊いてくれないかな、シビル。きみが着ている水着は素敵だよ。もしぼくの氣に入るのであるとしたら、それは青い水着だね」

シビルは若い男をじっと見つめて、それから自分の突き出した腹を見下ろした。「これは黄色だわ」と彼女がいった。「黄色だわ」

「そうかね？ もうちょっとこっちへきてごらん」

シビルは一步前に出た。

「本当にきみのいう通りだ。ぼくはどうかしていたんだな」

「水に入るの？」シビルがいった。

「それを真剣に考えていたんだよ。ぼくはそのことを懸命

に考えていたのさ。シビル、嬉しいだろう」

シビルは若い男が時どき枕代りに使っているゴムの浮袋をつついた。「空気を入れなくちゃ」と彼女はいった。

「そうなんだよ。いいと思ったんだけど、もっともったくきん空気を入れなくちゃいけなかったんだな」彼は握り拳をどけて顎を砂の上にのせた。「シビル、きみは元気だね。きみに会えてよかった。きみのことを話してくれないかな」彼は前へ手を伸ばして両手でシビルの両方の踝をつかんだ。「ぼくは山羊座だよ。きみは何にするかな？」

「シャロン・リップシャッツから聞いたわ、あの子をピアノ椅子と一緒に並んで坐らせてやったのね」

「シャロン・リップシャッツがそんなことをいったの？」

シビルは大きくうなずいた。

彼はシビルの踝を離して両手をひっこめ、右の前腕の上に片方の頬をのせた。「いいかね」と彼はいった。「偶然ってこともあるさ。ぼくは坐ってピアノを弾いていた。きみの姿はどこにも見えなかった。そしたらシャロン・リップシャッツがやってきて隣に坐ったんだよ。押しのけるなんてことはできない。そうだろう？」

「できるわよ」

「できないよ、そんなことは」と若い男がいう。「ぼくにはできない。だけど、ぼくがどうしたか教えてあげよう」「どうしたの？」

「隣に坐っているのがきみだと思つてゐるふりをしたのさ」

シビルはすぐにうづくまって砂を掘り始めた。「水に入りましょうよ」

「いいとも」と若い男が答えた。「何とかやれるだろう」

「こんどは、突き落としてね」とシビルがいった。

「突き落とすつて、誰を？」

「シャロン・リブシャツツよ」

「ああ、シャロン・リブシャツツか」と若い男がいう。

「どうしてそんな名前が浮かんできたのだろう？ 記憶と願望をかき混ぜながら（詩・S・エリオットの長）、というわけか」彼は不意に立ち上がつて、海を見た。「シビル、面白いことをやろう。バナナフィッシュをつかまえられるかどうかやってみるんだ」

「何をつかまえるの？」

「バナナフィッシュだよ」そういつて若い男はベルトをほどき、化粧着メイクアップを脱いだ。肩は痩せていて、色が白い。濃青色の水泳パンツをはいている。化粧着をまず細長くたたみ、それから三つに折る。目にあてていたタオルを伸ばして砂の上に広げ、その上にたたんだ化粧着をおく。かがんで浮袋を拾い上げ、右の小脇にしっかりとさむ。それから彼は左手でシビルの手を握つた。

二人は海の方へ歩き始めた。

「きみは前に、かなりたくさんバナナフィッシュを見たことがあるんだろうね」と若い男がいった。

シビルは首を振つた。

「見たことがないのかい？ とにかく、きみはどこに住んでいるの？」

「知らないわ」とシビルは答えた。

「知ってるさ。知ってるはずだよ。シャロン・リブシャツツは自分がどこに住んでいるか知っている。それに彼女はほんの三歳半なんだよ」

シビルは立ち止まつて、握られた方の手をぐいともぎ離した。何の変哲もない貝殻を拾い上げて、さも興味深げに見つめ、それから投げ捨てた。「コネチカット州ワリー・ウッド」そういつて彼女はお腹を前に突き出して歩き始めた。

「コネチカット州ワリー・ウッドか」と若い男はいった。「ひよつとしたら、あれはコネチカット州ワリー・ウッドの近くじゃないのかな？」

シビルは彼を見つめた。「それはあたしが住んでるところ」とじれったそうに彼女はいった。「あたしはコネチカット州ワリー・ウッドに住んでいるの」彼女は彼の前方に二、三步走り出て、左手で左の足をつかみ、二度三度びよんぴよんはねた。

「それで何もかもはつきりした。みんな何のことか分から

ないだろうね」と若い男がいった。

シビルは足を離した。「『ちび黒サンボ』を読んだことがある？」

「きみがぼくにそんなことを訊くなんて、変だなあ。昨夜たまたまぼくはそいつを読み終ったところなんだよ」彼は手を差し伸ばしてまたシビルの手を握る。「あの本のこと、どう思った？」と彼はシビルに訊ねた。

「虎たちがあの木のまわりをぐるぐるまわったんでしょ」

「ぐるぐるまわって、あのままとまらないだろうと思った。あんなにたくさんの虎を見たことはないなあ」

「たったの六匹よ」とシビルがいった。

「たったの六匹だって！」と若い男がいった。

「あれをたったのなんていうのかい？」

「蜜蠟、好き？」

「何が、好きかって？」と若い男は訊ねた。

「蜜蠟よ」

「大好きさ。きみは？」

シビルはうなずいた。「オリーブは好き？」と彼女が訊いた。

「オリーブ——うん、好きだよ。オリーブと蜜蠟。どこへ行くときでも、持っていくのさ」

「シャロン・リップシャッツ、好き？」シビルが訊ねる。

「うん、うん、好きだよ」若い男が答える。「あの子の、

どくに好きなどころは、ホテルのロビーにいる小犬にわるさをしてはいけないことだね。たとえば、カナダから来た女の人の飼っているあの小型ブルドッグさ。こんなとききみはたぶん信じないだろうが、だけど小さな女の子のなかには風船の柄であの小さな犬をつつくのが好きな子だっているんだよ。シャロンはそんなことはしない。あの子はいたずらもしないし、苛めたりもしない。だからぼくはシャロンをとても好きなのさ」

シビルは黙っている。

「あたし蠟燭をかむのが好き」やつと彼女が口を開く。

「誰だってそうだよ」若い男はそういって、両足を水にひたす。「うへえ！ 冷たいや」彼はゴムの浮袋を上向きに落とした。「まだ。ちょっと待ってくれ。シビル。もう少し沖にいくまで待つんだ」

二人は水がシビルの腰にくるところまで入っていった。それから、若い男は彼女を抱き上げて浮袋の上に腹這いはらばいにせてやる。

「きみは水泳帽をかぶらないのかい？」と若い男が訊いた。「離しちゃいやよ」とシビルが命令した。「ねえ、しっかりつかまえてて」

「カーペンターのお嬢さん。大丈夫。ちゃんとつかまえているからさ」若い男がいう。「きみはただバナナフィッシュユがいるかどうか、目を開けて見張っていればいいんだよ。